

歿後

玄峰老大師五十年  
宋渤老大師廿七年  
墨蹟展



没後

玄峰老大師五十年  
宋淵老大師二十七年

墨蹟展

会期／平成二十二年三月九日（火）～六月六日（日）  
会場／三島市郷土資料館  
主催／三島市教育委員会 三島市郷土資料館

## ごあいさつ

このたび三島市郷土資料館において、没後玄峰老大師五十年宋淵老大師二十七年墨蹟展を開催することになりました。

山本玄峰老師は沢地の龍澤寺の復興に努められ、この寺を本拠に徳を磨かれました。全国から多くの人が老師の教えを求め集まったことが知られ、京都の妙心寺派の管長も務められています。

また、中川宋淵老師は玄峰老師に嗣法し龍澤寺住職とられました。その学識は多くの人に感銘を与えました。

本展では、墨蹟やゆかりの品などを紹介することによって、三島の人々が受けた影響や、両老師の魅力を多くの方々知って頂きたいと存じます。

未筆ながら、本企画展を開催するにあたりまして、龍澤寺の後藤榮山老師をはじめ多数の皆様のご理解とご協力をいただき深く感謝申し上げます。また、今後も当館に対する温かいご支援をいただければ幸いです。

平成二十二年三月

三島市教育長

川村 晃

## 玄峰老師・宋淵老師の思い出

宗教は古くから祈りや想いの対象として、仏像や寺院を作ってきた。そして老師は書を遺しました。それは徳の表象でもありました。

私共が昭和五十七年に「山本玄峰老師展」を開催した際、中川宋淵老師のご指導をいただき玄峰老師の書を展示することが出来ました。宋淵老師は玄峰老師の書を展示ケースの中に掛ける度に、真冬のコンクリートの床に素足のままひれ伏して一点一点拝んでいらっしゃいました。

またその際に、先師の教えがこの書に体现されていると話され、書かれた前後の経緯について丁寧にご説明をいただきました。禅は「坐禅」だけではなく、人間の生き様そのものが「禅」であり、先師の心は書の中にある、このように話されていた覚えがあります。

あれから三十年近く経ちますが、玄峰老師、宋淵老師という得難い師弟墨蹟展が開催されることは懐かしさと同時に三島市にとりましても大変意義深いものと存じます。

平成二十二年三月

三島市教育部参事

稲木 久男

# 目次

|               |               |    |
|---------------|---------------|----|
| ごあいさつ         | 三島市教育長 川村 晃   | 3  |
| 玄峰老師・宋淵老師の思い出 | 三島市教育部参事 稲木久男 | 3  |
| 目次            |               | 4  |
| 玄峰・宋淵両老師の風光   | 圓通山龍澤寺 後藤榮山老師 | 5  |
| 図版            |               | 6  |
| 作品解説          |               | 25 |
| 落款・印章         |               | 30 |
| 中川宋淵老師と俳句     |               | 32 |
| 年譜            |               | 34 |
| 作品目録          |               | 37 |
| 参考文献          |               | 38 |
| 謝辞 協力者        |               | 39 |

## 凡例

- ・本図録は企画展「没後 玄峰老師50年 宋淵老師27年 墨蹟展」(会期：平成二十二年三月九日～六月六日)の展示図録である。
- ・本展及び図録中の「宋淵」或いは「宋淵」の表記については、作品等に基づくものを除き、便宜上「宋淵」で統一し、同様に師家に対する敬称「老師」或いは「老師」についても「老師」に統一した。
- ・各図版には、順に作品番号、作品名を記した。
- ・漢字の書体については、原則として常用漢字を用い、賛文等の原文翻刻については、正字を用いた。
- ・変体仮名は原則として平仮名に改めた。
- ・仮名遣いについては原則として原文に従い、一部読解の便宜を図るため、語意等に支障のない範囲で濁点等を補った。また、原文中仮名の繰返し(く)の字記号)についてはそのまま仮名をあてた。
- ・図版の作品番号は展示番号と一致するが、展示順序は必ずしも一致しない。
- ・展示替え等のため、本図録に掲載された作品のうち、会場に常時展示されていないものがある。
- ・本展の企画及び図録の編集、作品解説は三島市郷土資料館学芸員渡邊美幸が担当し、当館学芸員鈴木隆幸、田中之博の協力を得た。また落款・印章については田中が担当した。
- ・本図録の掲載図版については所蔵者から提供を受けたものを除き、渡邊と田中が撮影を行った。
- ・本展の開催及び図録編集については全面的に圓通山龍澤寺(三島市沢地三三〇)の監修・協力を得た。

## 玄峰・宋淵両老大師の風光

本年は難値難遇の法縁と申すべき、玄峰老師遷化されて五十年、宋淵老師二十七年に相當し、龍澤寺に於いて法要を厳修し報恩大囀心を修行する。これに因んで三島市郷土資料館が両老師の勝蹟を景仰し墨蹟展を開催するに當り、その生縁佛縁を記して責を塞ぐ所以である。

姓山本、僧名玄峰、般若窟。慶應二年和歌山県に生る、「冬雲の下で菰に伏せられたまま、小さなひとつのいのちが既に息もたえだえになつてゐる。権現さまのお湯の地熱と息吹きかけられた般若の水の効き目で辛うじて赤子は蘇つた。……十九歳失明、裸足四国遍路を發願。……熊野の奥に生まれ出でて 筏流しや木根堀り 盲となりしが 縁にして まことの目明きと なりにけり」と宋淵老師は今様に謳われた。後に五カ所の禪の専門道場を撥草參玄歴參され、五十歳にして龍澤寺に晋山、龍澤寺、松蔭寺、瑞泉寺等由緒ある寺院の荒廢せるを再興、八十二歳にして京都大本山妙心寺管長を歴任、九十六歳遷化されるまで正法久住を祈念し般若の大慈悲を行ぜられた大徳である。

姓中川、僧名宋淵、蜜多窟。明治四十年山口県に生る、旧制一高、東大にて芭蕉の「猿蓑」を研究し、それが縁となつて塩山向獄寺にて出家。「涼しさや 心をうつす 水と空」と発句、その後昭和十年四月龍澤寺に転錫し玄峰老師に嗣法し昭和二十六年三月晋山、學人を接待し数多くの英才を打ち出す。その傍ら、花に問えば花を語り天地無師の珍宝を十七文字に託して賦したもの数知らず、秀脱の句あり枯高の句あり、佛法幽玄を遊行せし七十九年の行履獨自無比。『詩龕』『命篇』の句集あり。

由来、禅僧の墨蹟が所謂書家と異なり珍重される所以は、一切処に於いて執着せざる無心の境地から書法書技を超えて遊戯三昧に徹した妙趣にして、この墨痕を通じて悟道の糧となることを冀いて序文となす。

平成二十二年二月十五佛涅槃之日

# 山本玄峰老師



1 玄峰老師頂相



山本玄峰老師は、慶応二年（一八六六）、和歌山県湯の峰温泉（田辺市本宮町）、西村氏芳野屋に誕生。生後すぐに捨てられ、岡本善蔵・とみえ夫妻の養子となり、芳吉と名付けられる。十九歳の時、眼病を患い、失明の不幸に見舞われ、四国遍路を發心。二十四歳、七回目の霊場巡拝の途中、高知県三十三番札所雪蹊寺で行き倒れになる。この時、雪蹊寺住職山本太玄和尚と出会い仏門に入る。二十五歳、雪蹊寺にて得度、宣詮と号す。

二十六歳の頃より永源寺、祥福寺などで雲水としての修行を重ね、明治三十六年（一九〇三）太玄和尚と養子縁組し、これより山本玄峰となる。三十八歳の時、雪蹊寺の住職となり、京都門福僧堂に再掛塔、宗般老師に嗣法する。その後龍澤寺、松蔭寺、瑞泉寺、日暹寺（現・日泰寺）、正受庵、新京妙心寺別院、円福寺住職を歴任し、昭和二十二年（一九四七）妙心寺派管長に就任する。

龍澤寺には、大正四年（一九一五）五十歳の時に入り、当時廢寺寸前だった寺を復興させる。太平洋戦争終結にあたって、時の首相鈴木貫太郎に『耐え難きを耐え忍び難きを忍び・・・』と提言したことはあまりにも有名である。

昭和三十六年（一九六一）六月三日三島市竹倉にて遷化。九十六歳。



# 中川宋淵老師

## 2 宋淵老師頂相



摩天一聲雷 直登三級浪  
 麟龍頭角 天下蔭涼  
 參玄幾多載 滅却般若窟  
 飛錫海東之外 流通正法  
 戒麟深測之內 入法俱忘  
 向上鉗鏈 坐斷十方  
 去却擔子 安眠高臥  
 運出家珍 全提商量  
 大人境界 氣宇當陽  
 唵  
 夫是此謂特贈歷任当山才十世玄珠淵禪師大和尚之真  
 平成甲戌初春 臨濟正回梵香拜讚

中川宋淵老師は、明治四十年（一九〇七）三月十九日父・助太郎（陸軍軍医）、母・和子の長男として山口県岩国町（現・岩国市）に誕生。名は基。父が大正七年（一九一八）三十五歳で早逝すると、その後は母の手一つで育てられる。  
 大正十二年（一九二三）東京第一高等学校入学。この頃から俳句を作り、俳号「臙旦」。昭和二年（一九二七）東京帝国大学（現・東京大学）文学部国文学科に入学。昭和四年（一九二九）卒業、卒業論文は芭蕉の『猿蓑』。  
 大学のクラブ活動で禅に触れ、昭和六年（一九三一）三月十九日山梨県塩山・向嶽寺の勝部敬学老師に就き得度。九月、俳誌『雲母』の主筆・飯田蛇笏に入門。昭和七年（一九三二）『大菩薩峠』の著者・中里介石と交遊。大菩薩峠で木食（一切生食・一日一食）の修行を重ねる。  
 昭和十年（一九三五）龍澤寺に転錫。山本玄峰老師に嗣法。昭和二十六年（一九五一）四月二十五日龍澤寺第十世として晋山。昭和二十四年（一九四九）から昭和五十七年（一九八二）の三十三年間に十三回にも及ぶ米國巡錫。昭和四十八年（一九七三）住職退任。  
 昭和五十九年（一九八四）三月十一日龍澤寺にて遷化。七十八歳。



# 龍澤寺

3 達磨



龍澤寺は、三島市沢地にある臨済宗妙心寺派の寺。山号は圓通山。禅修業の専門道場。山号の「圓通」は観音菩薩の別号。本尊は子安観世音菩薩。  
宝暦十一年（一七六一）白隠禪師が沢地川の岸にあつた廢庵を興して建立し、開基となる。白隠禪師を筆頭に、東嶺禪師、星定老師、玄峰老師と日本を代表する優れた禅僧を生み出している。  
寺内には鍔細工の名工・入江長八の作品が数多く残されており、また幕末の偉傑・山岡鉄舟が江戸から参禅に通つたことは、よく知られている。



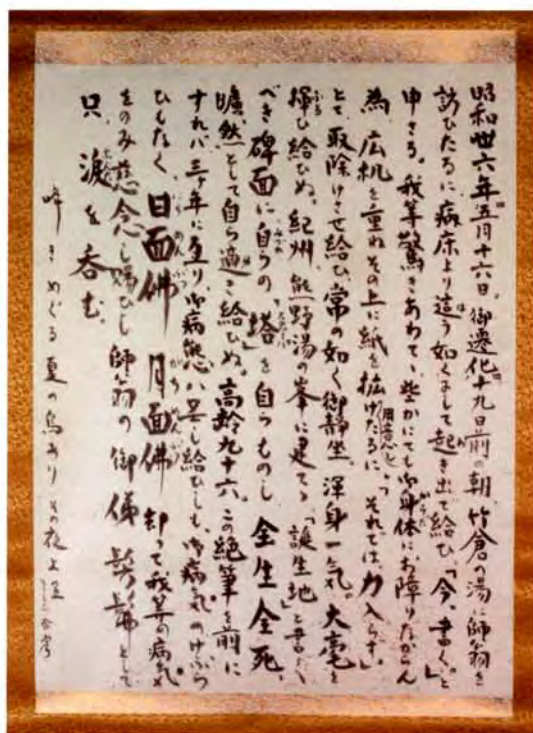


玄峰老師墨蹟

4 玄峰塔



5 玄峰塔由来記







7  
幽光

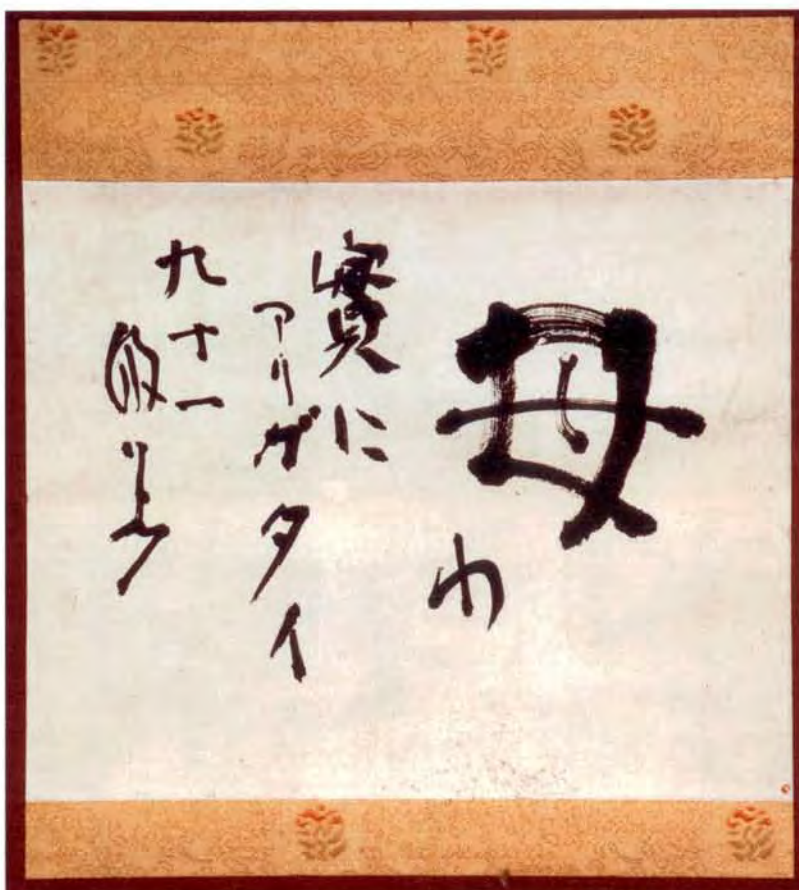


8  
夢





11 赤子 これはかみの子



12 母 母にアリガタイ



13 富士山 東海天

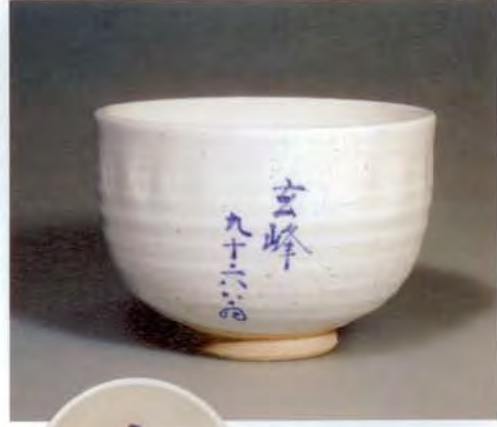


14 なまず ぬらりくらりとついでとしより





16 茶碗 翁



15 茶碗 玄



17 独楽香合



18 皿





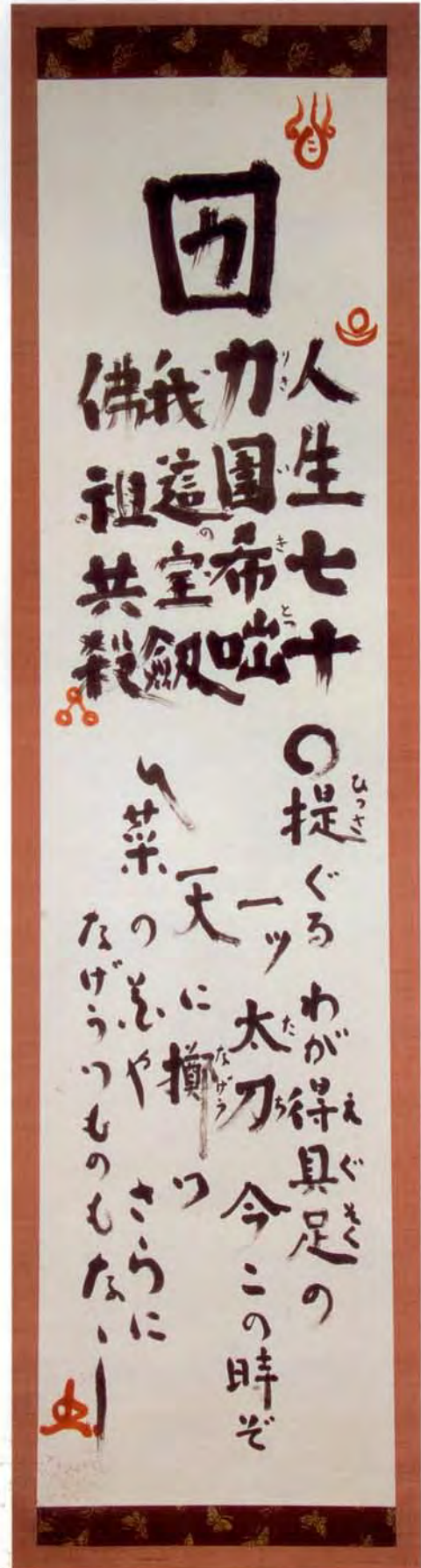
宋淵老師墨蹟

19 蜜庵



20 南無大菩薩







23 土性骨



24 松老雲閑



25 禅堂の中にも舞ひぬ夕もみち



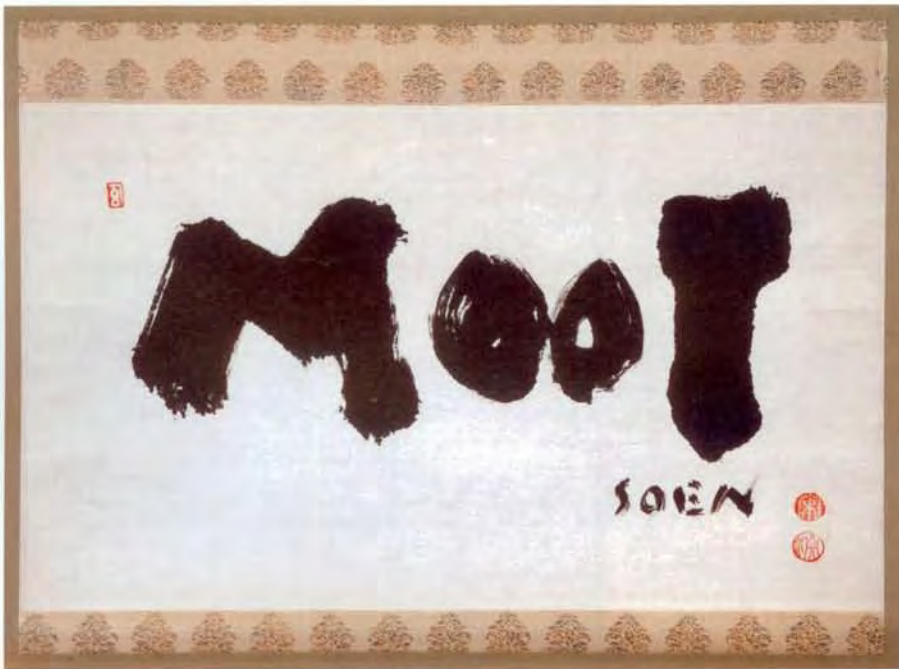
26 春之山ゆけば道ありどこまでも







27  
只



28  
MOOT

29 日月觀音



30 不動尊





31  
雲母



32  
盆  
母



宋淵老師ゆかりの品

33 色紙 了々々時無可了



34 色紙 勅題も人も光の春なれや



35 色紙 とらやーやー無限次元の夜が明けて



36 深皿 観自在







38 茶杓 銘大吉 共筒



37 茶杓 銘 Jerusalem 共筒



40 命篇



39 詩籠



# 作品解説

## 1 玄峰老師頂相

結城素明画 玄峰老師贊

贊・落款「摩訶般若窟 從來魚門戸 日月自去來 魚邊和衆生 誓願魚盡令法久住」

昭和二十九年十二月二十八日時年八十九般若玄峰自贊

※結城素明(明治八年〜昭和三十一年)は、日本画家。川端玉章に師事した。玄峰老師を尊敬していたことが、描画の契機になったと思われる。

## 2 宋淵老師頂相

正因老師贊

贊・落款「擘天一聲雷 直登三級浪 麟龍頭角

天下蔭涼 參玄幾多載 滅却般若窟 飛錫海東之

外 流通正法 藏鱗深洩之内 人法俱忘 向上鉗

錘 坐斷十方 去却擔子 安眠高臥 運出家珍

全提商量 大人境界 氣宇當陽 嘖

夫是此謂特贈歷住当山才十世玄珠禪師大和尚之真

平成甲戌初春 臨濟正因焚香拜讚

臨濟正因は、臨濟寺二十六世鈴木正因老師。因みに臨濟寺(静岡市葵区)は、臨濟宗妙心寺派の専門道場。

## 3 達磨

白隠禪師自画贊

贊「直指人心 見性成佛」(碧巖録) 達磨

図の贊として最も多く用いられている成句である。白隠は、よく達磨を描き庶民に説いた。文意は人間界やわずらわしいことにとらわれず、自分が仏そのものであることを体得すること。

印章は、「白隠」(朱壺印)、「慧鶴之章」(朱文方印)、関防印一顆(印文未詳)

※白隠禪師(白隠慧鶴)は、貞享二年(一六八五)静岡県沼津市の原で生まれ、十四歳で出家、三十三歳で原の松蔭寺に住し、晩年に龍澤寺を開創。五百年に一人と言われるほどの高僧となり、臨濟宗中興の祖と称される。「駿河には過ぎたるものが二つあり富士のお山に原の白隠」とも謳われた。

## 4 玄峰塔

玄峰老師筆

昭和三十六年(一九六一)五月十六日、三島市竹倉・伯日荘での揮毫。絶筆。玄峰老師は「わしが死んでも、墓や塔を建てるな」と常々述べていたが、信徒の要望に折れて揮毫したもので、その際には筆が畳にくい込んだという。見る者は、その気力に身動きできなかつたそうである。この時の様子は「玄峰塔由来記」(No.5)に詳しい。

## 5 玄峰塔由来記

宋淵老師筆

「玄峰塔」(No.4)揮毫の様子について記したものの。文末に発句を付す。内容は次のとおり。



玄峰老師と宋淵老師



昭和廿六年五月十六日。御遷化十九日前の朝、竹倉の湯に師翁を訪ひたるに、病床より這う如くにして起き出で給ひ、「今、書く。」と申さる。

我等驚きあわて、些かにても御身体に、お障りなからん為、広机を重ねその上に紙を掛け用意したるに、「それでは、力入らず。」とて、取除けさせ給ひ、常の如く御静坐。渾身一氣。大毫を揮ひ給ひぬ。紀州、熊野湯の峯に建て、「誕生地」と書くべき碑面に自らの「塔」を自らものし全生全死、曠然として自ら適き給ひぬ。

高齡九十六。この絶筆を前にすれば、三ヶ年に亙り、御病態は呈し給ひしも、御病気のけふらひもなく、日面佛、月面佛、却つて我等の病氣をのみ慈念し賜ひし師翁の御偉、髣髴として只、涙を呑む。

啼きめぐる 夏の鳥あり その夜より  
そうえん合筆

※玄峰塔由来記は数度の加筆があると考えられる。傍線部には、「五」の右上に「四」の見せ消しが、「十九」の右上に「四」の追記が認められることから、玄峰塔揮毫日は四月十六日御遷化四十九日前か。

昭和二十八年（一九五三）四月十二日に龍澤寺で開催された米寿祝賀会にて揮毫し、参加者が書きしたもの。当日の出席予定者二百五十人に対し、それを大きく上回る約四百人も参加者だった。寄書きに宋淵老師（宋淵）の名もみえる。

6 寿  
玄峰老師筆

8 夢  
玄峰老師筆

7 幽光  
玄峰老師筆

9 指月  
玄峰老師筆

10 雪月花  
玄峰老師筆

「幽光」とはかすかな光の意。玄峰老師は若くして盲目になり、七度の四国遍路を決意。その七度目にわずかに見えるようになった。深遠微妙を表現する中世芸道の理念「幽玄」にも通じると思われるこの語は、まさに心眼で捉えた深遠なる世界のわずかな光を表しており、玄峰老師の幽光に對する無上の喜びと感謝の意が書に込められているようである。

「夢」とはすべての執着から脱却し、悟りも意識も名譽も忘れ去った境地のこと。玄峰老師は、毎年「夢」という字を必ず書いた。絶筆の「玄峰塔」を書く時でさえも、筆ならしに「夢」と書いたという。

月は真理のたとえ、その月を指す指は仏教の教えをたとえたもの。真理（月）こそが大切で、教え（指）にとらわれてはならないという意である。

雪月花は四季の移り変わりに見られる自然美の総称。禅では「雪」を純真無垢のけがれない心、「月」を心境の澄みきった状態、「花」はその咲く

相を仏の心や無心にたとえている。

11 赤子 これはかみの子  
玄峰老師筆

12 母わ実にアリガタイ  
玄峰老師筆

13 富士山 東海天  
玄峰老師筆

江戸時代初期の漢詩人・石川丈山の七言絶句「富士山」の結句「白扇倒懸東海天」に拠る。東海は中国からみた日本を指し、東海の天に高く聳える山、すなわち富士山をいう。

玄峰老師が晩年静養していた三島市竹倉の伯日荘で「東海天」を書いた時、「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠、それじゃ」と述べている。

玄峰老師は「母」の字を好んで揮毫した。また「母」という言葉が口にしても涙ぐむような人であったというが、育ての母・岡本とみえは幼少の芳吉（玄峰老師）に對し、とても優しくなつたようである。恐らく厳格な父・善藏とは対照的だったに違いない。その「母を想う心」が書に込められているようである。

玄峰老師は「母」の字を好んで揮毫した。また「母」という言葉が口にしても涙ぐむような人であったというが、育ての母・岡本とみえは幼少の芳吉（玄峰老師）に對し、とても優しくなつたようである。恐らく厳格な父・善藏とは対照的だったに違いない。その「母を想う心」が書に込められているようである。

玄峰老師は「母」の字を好んで揮毫した。また「母」という言葉が口にしても涙ぐむような人であったというが、育ての母・岡本とみえは幼少の芳吉（玄峰老師）に對し、とても優しくなつたようである。恐らく厳格な父・善藏とは対照的だったに違いない。その「母を想う心」が書に込められているようである。

玄峰老師は「母」の字を好んで揮毫した。また「母」という言葉が口にしても涙ぐむような人であったというが、育ての母・岡本とみえは幼少の芳吉（玄峰老師）に對し、とても優しくなつたようである。恐らく厳格な父・善藏とは対照的だったに違いない。その「母を想う心」が書に込められているようである。

玄峰老師は「母」の字を好んで揮毫した。また「母」という言葉が口にしても涙ぐむような人であったというが、育ての母・岡本とみえは幼少の芳吉（玄峰老師）に對し、とても優しくなつたようである。恐らく厳格な父・善藏とは対照的だったに違いない。その「母を想う心」が書に込められているようである。

#### 14 なまず ぬらりくらりとついにとしより

玄峰老師筆

なまずと瓢箪の絵については、昭和三十四年（一九五九）NHKラジオ「朝の訪問」での東大教授檜山義夫氏との対談がある。そこで玄峰老師は、なまずのようなのらくらした気でも、外から見たらなかなか用心深いところがあり、瓢箪で抑えていく位の気持ちで世の中を渡っていくとよい、どんな決まったことでも人間の行っていることは、長く百年続くことはない、と述べている。（『玄峰老師』高木蒼梧著を参考）

#### 15 茶碗 玄

玄峰老師筆 五代尾関作十郎作

昭和六十二年（一九八七）六月三日玄峰老師木像開眼供養記念品。犬山焼。

玄峰老師は、六十三歳から四年間愛知県犬山市の瑞泉寺住職として寺の復興に尽力した。玄峰老師と当時の尾関作十郎陶房の主人とは親交があった。

※犬山焼は、江戸時代元禄年間に犬山市東部の今井に窯を築いたのが始まりで犬山藩主のお庭焼であった。

#### 16 茶碗 翁

玄峰老師筆 五代尾関作十郎作

昭和五十二年（一九七七）五月三日玄峰忌、宗舜忌合斎の記念品。犬山焼。付属の縁起には「十七年は慈明忌 われ等のイノチ他界遷化后ますます明るくいよいよ慈しみに溢るるをお祝い申すのであります」「般若窟老大師の残された『翁 九十

歳 御筆』をいただき慈明盃が生まれました」などとする。

#### 17 独楽香合

玄峰老師筆 五代尾関作十郎作

蓋裏には朱書きで「寿 般若」の文字あり。犬山焼。

#### 18 皿

玄峰老師筆

平成四年（一九九二）十月十九日、東嶺禪師二百遠忌、玄峰老師三十三年忌、宗忠老師三年忌の記念品。

※東嶺禪師は、龍澤寺第二世。享保六年（一七二二）滋賀県東近江市生まれ、白隠禪師の法をつぎ、白隠禪師とともに龍澤寺の創建に力を尽くした。

※宗忠老師は、昭和二十九年（一九五四）より龍澤寺にて玄峰・宋淵両老師に師事し、昭和四十八年（一九七三）に龍澤寺第十一世として晋山。

#### 19 蜜庵

宋淵老師筆

「蜜庵」は、宋淵老師の室（窟）号「蜜多窟」に因む造語。宋淵老師自身を指す。海外の方に書を贈る際は、度々ローマ字にて「JOHN」と署名していた。

#### 20 南無大菩薩

宋淵老師筆

宋淵老師は折に触れ「なむだいぼーさー」を唱えているが、これは山梨の大菩薩峠に由来したも

のと思われる。

老師は、昭和六年（一九三一）、山梨県甲州市にある塩山・向嶽寺（臨済宗向嶽寺派大本山）の勝部敬学老師に就き得度し、その向嶽寺から歩いて四、五時間の大菩薩峠に何度も籠り修行をした。それ故大菩薩峠は宋淵老師の精神の拠り所となっていたのではないか。

※大菩薩峠は、甲府盆地を囲む山々の東側にある、標高千八百九十七mの峠。



向嶽寺中門

#### 21 因

宋淵老師筆

千利休の辞世の偈と和歌「人世七十 力因希咄 吾這寶劍 祖仏共殺 提ル我得具足の一太刀 今此時ぞ天に 抛」に宋淵老師が手を加え、更に「菜の花や さらに なげうつものもなし」の句を添えたもの。

#### 22 南無尽十方不可思議無量壽光如来

宋淵老師筆

「南無尽十方不可思議無量壽光如来」は、阿弥陀如来の正式な名称。



### 23 土性骨

宋淵老師筆

「土性骨」は性質・性根を強めていう語。「ど」は接頭語で、「土」は当て字。ど根性、ど性根。

### 24 松老雲閑

宋淵老師筆

「松老雲閑」とは、松の老木の上に雲が静かに漂う意。「松老いて雲閑かに、曠然として自適す」(『臨濟録』序文)に拠る。

### 25 禅堂の中にも舞ひぬ夕もみち

宋淵老師筆

全山のもみじが折からの風で舞う。その一片二片が寂然たる禅堂の中にも舞い入って来る。夕日に照らされたもみじは尚一層紅く輝きを増し、禅堂のモノトーンが更にそれを強調する、そんな絵画にも似たこの句の中に動と静が巧みに表現されている。この書は中央に「舞」の一字を大書し、その優麗な書体がもみじのはらはらと舞う様を演出しているように感じられる。

### 26 春之山ゆけば道ありどこまでも

宋淵老師筆

龍澤寺の裏山より箱根連山までつながっている山道を詠んだ句。四十歳を過ぎて僧堂へ入ったある僧と共に托鉢へ出掛けた帰り道、その僧に対して「山上更に山あり(略)頑張りなさい」と激励しながら示したのがこの句である(『蜜多余香』より)。生命の息吹が誕生する「春」という季節に、

遠くどこまでも続く山道を、これから歩む長い人生にたとえているかのようである。

### 27 只

牧島如鳩画 宋淵老師賛

賛・落款「大般若合同船 只今の 只に 只乗れ 只の人 宋淵及如九 昭和四十八年五月十四日 於心画会」

宋淵老師は「只」について「只―それが分かれば、自由の本質も分かる。只とは只。法然上人のいう凡夫。(中略)只お茶を飲めばいい。いろいろなものをもぞもぞくつつけない。(中略)仏法も同じ。只ありがたくなればいいのに、仏教哲学したり、坐禅したりしなくては、生きていることのありがたさがさっぱり分からんようになる。茶でないのが茶、禅でないのが禅」(『仏音』)と述べている。

〈宋淵老師の海外布教について〉  
昭和二十四年(一九四九)かねてから文通のあった千崎如幻師との法縁が熟し、第一回来国巡錫。第十三次米国巡錫が最後の巡錫。ニューヨーク郊外にある国際山大菩薩禅堂は老師の命名。

※牧島如鳩(如九)本名は省三、明治二十五年(一八九二)生まれ。栃木県出身の日本ハリストス正教会の聖職者で聖画師(アイコン画家)。聖名はパウエル。観音図や達磨図など仏教的な絵画も描いた。昭和四十六年(一九七二)宋淵老師の第九次米国巡錫に同行した。

### 28 MOOT

宋淵老師筆

宋淵老師は、「ユダヤ教のお祈りの中に「ムート、

ムート」というのがある。あれも禅でいう「無―ツ」によく似ていますね」(『蜜多余香』)と述べている。海外布教に関係あるか。

### 29 日月観音

沢蘆月画 宋淵老師賛

賛「日月観」  
箱書「日月観音像 了心画」

### 30 不動尊

牧島如鳩画 宋淵老師賛

賛「誓願成」  
誓願とは、仏道を志すものが願いを成就させるという誓いを立てること。誓願成は、かならず成仏するという誓願。

軸裏には、「不動尊 玄峰老師麻衣にて」とある。因みに龍澤寺年中行事の一つとして不動尊のお祭りが三月二十八日に行われる。龍澤寺内に不動尊があるのは、もともと真言宗の寺院だったからではないか。

### 31 雲母

宋淵老師筆

「うんも」「きらら」とも。宋淵老師が師と仰いだ俳人・飯田蛇笏の主筆する俳誌「雲母」に拠るか。老師は高校時代から俳句を始め、芭蕉「猿蓑」を大学の卒業論文に選ぶ。しかしながら「おまえさんは俳人になってはいかん」「私は俳人ではありませぬ」という玄峰老師との商量にある如く、俳句と禅、禅と俳句の区別をしない俳禅一如の世界

を形成するのが宋淵俳句の真髓である。

※飯田蛇笏(明治十八、昭和三十七年)は、山梨県生まれ、早稲田大学英文科中退。高浜虚子に師事したのち、俳誌『雲母』を主宰した。



短冊 飯田蛇笏日記「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」山梨県立文学館蔵



宋淵老師筆「雲母」山梨県立文学館蔵

### 32 盆 母

宋淵忌の記念品。付属の口上には「蜜多窟宋淵老師の絶筆『雲母』から母の字をいたゞいて梵額にしました。(中略)心鏡室示忠 合掌」とある。

### 33 色紙 了々々時無可了

宋淵老師筆

公案(禪の問答)の最終問題。

### 34 色紙 勅題も人も光の春なれや

宋淵老師筆

宋淵老師は毎年、勅題(新年の歌会始の題)に合わせ色紙などに揮毫していた。この俳句は、昭和三十六年(一九六一)勅題「光」に拠るか。

### 35 色紙 とらやーやー無限次元の夜が明けて

宋淵老師筆

昭和四十九年(一九七四)「寅」の年、勅題「朝」

に因んで揮毫したもの。この句について宋淵老師は、「なむ・(南無)からたんのー・(宝)とらやーやー(三宝)仏・法・僧の三宝に帰命し奉るの意なり。世界々々と申しても単に三次元のみの世界ではありませぬ。四次元、五次元……無限次元の大世界のイノチが、今・ここに、ひとつひとつのモノとなつて脉動し、欲舞し、赫奕しているのがあります。元来、迷闇の夜は、とつくり明け開いてをったのだと大自覚することが、本当の『あけておめでとう』であります」(『法光寿』)と述べている。

### 36 深皿 観自在

宋淵老師筆

裏「法泉寺平和慰霊観音開眼記念」

高台内「昭和四十四年五月十八日」

駿東郡清水町法泉寺の平和慰霊観音開眼記念品。

### 37 茶杓 銘 Jerusalem 共筒

宋淵老師筆

Jerusalemは、イスラエル共和国の首都。宋淵老師は、度々ユダヤ教、キリスト教の聖地エルサレムを訪れ、昭和四十三年(一九六八)にも龍澤寺第十二世中川球童老師が当時護るオリブ山に留錫。ここを基仏寺と命名した。

この茶杓はエルサレムの菩提樹で作られている。



茶杓裏

### 38 茶杓 銘大吉 共筒

宋淵老師筆

「立春大吉」の意。立春の早朝、禅寺では門に「立春大吉」と書いた紙を貼る習慣がある。



茶杓裏

### 39 『詩龕』

中川宋淵著

宋淵老師の著作物(遺作集合含む)として、『詩龕』『命篇』『遍界録』『古雲抄』『法光寿』『空華』などがある。

本書は、大正十五年(一九二六)から昭和十一年(一九三六)までの詩句文を収録したもの。

### 40 『命篇』

中川宋淵著

『詩龕』に続く昭和十一年(一九三六)から同二十四年(一九四九)までの作品を集めた第二詩句文集。最終頁に見える「夢」の一字は宋淵老師の直筆。本書跋文には「余の一生は詩龕・命篇・霊筐の三部作を以てなり、命篇は更に大菩薩篇、大陸篇、龍沢篇の三篇に分る。龍沢篇に前篇後編あり。本書は即ち龍沢後篇の一部なり(後略)」とある。因みに第三詩句文集「霊筐」は発表されていない。



# 落款・印章

図版1 玄峰老師頂相

墨書款記「昭和二十九年十二月二十八日時年八十九  
般若玄峰自贊」  
「臨濟正宗」朱文長方印（關防印）  
「般若窟」白文方印・「玄峰」朱文方印  
「素明」金泥書印

昭和二十九年十二月二十八日<sup>時</sup>年八十九般若玄峰自贊



図版2 宋淵老師頂相

墨書款記「夫是此謂特贈歷住当山才十世玄珠淵禪師大  
和尚之真 平成甲戌初春 臨濟正因焚香拜讚」  
「白拈賤」朱文長方印（關防印）  
「瀟雪」白文方印・「正因」朱文方印

夫是此謂特贈歷住当山才十世玄珠淵禪師大和尚之真  
平成甲戌初春 臨濟正因焚香拜讚



図版6 寿

墨書款記「八十八翁般若」  
「臨濟正宗」朱文長方印（二顆）（關防印）  
「玄峰」白文方印・「般若窟」朱文方印



図版7 幽光

墨書款記「九十三翁般若」  
「臨濟正宗」白文長方印（關防印）  
「龍」白文方印・「圓通山主」朱文方印



図版8 夢

墨書款記「九十二翁般若」  
「臨濟正宗」白文長方印（關防印）  
「般若窟主」白文方印・「玄峰」朱文方印



図版9 指月

墨書款記「般若」  
「結勝緣」朱文長方印（關防印）・「玄峯」朱文橫田印



図版10 雪月花

墨書款記「八十三翁般若」  
「結勝緣」朱文長方印（關防印）・「玄峯」朱文橫田印



図版11 赤子 これはかみの子

墨書款記「九十三吾兵へ」  
「臨濟正宗」白文長方印（關防印）  
「般若窟主」白文方印・「玄峰」朱文方印



図版13 富士山 東海天

墨書款記「九十五般若」  
「臨濟正宗」白文長方印（關防印）  
「玄峰」朱文方印



図版14 なまず むらりくらりとついにとしより

墨書款記「九十一般若」  
「烟霞泉石」朱文長方印（關防印）  
「般若窟」白文方印・「玄峰」朱文方印



図版19 蜜庵

墨書款記「MITTAN SOEN」  
「石主雲」朱文長方印（關防印）  
「宋淵」朱文方印・「蜜多」白文方印



図版20 南無大菩薩

「日月」白文円印・「三顆」朱文壺印  
円印内に「宋淵之印」朱文方印



図版22 南無尽十方不可思議無量壽光如来

「佛法僧寶」朱文重郭円印・「三顆」  
「蜜多窟主」白文方印・「宋淵」朱文方印



図版23 土性骨

墨書款記「てうえん」  
「正法久住」朱文長方印（関防印）  
「蜜多」白文方印・「宋淵」朱文方印



図版24 松老雲閑

墨書款記「蜜多」  
「壺中日月」朱文長楕円印（関防印）  
「龍文」朱文方印・「宋淵」白文方印



図版25 禅堂の中にも舞ひぬ夕もみち

墨書款記「宋淵」  
「木人」朱文楕円印（関防印）  
「蜜多」白文方印・「玄珠」朱文方印



図版26 春之山ゆけば道ありとこまでも

墨書款記「龍翁」  
「壺中日月」朱文楕円印（関防印）  
「蜜多」白文方印・「宋淵」朱文方印



図版27 只

墨書款記「宋淵及如九 昭和四十八年五月十四日於心画堂」  
朱文壺印・「龍文」朱文方印・「日月」白文円印



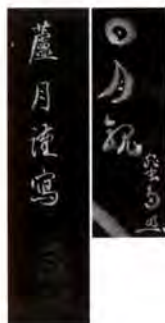
図版28 MOOT

墨書款記「SONI」  
「玄」白文長方印（関防印）  
「宋」白文円印・「淵」朱文円印



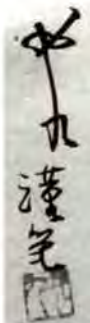
図版29 日月観音

金泥書款記「日月観 蜜多（元花押）・「盧月謹寫」  
「了心」書印



図版30 不動尊

墨書款記「如九謹筆」  
「如九」朱文方印



図版33 色紙 了々々時無可了

「宋淵」朱文方印（関防印）  
「宋淵」朱文方印・「蜜多」白文方印



図版34 色紙 勅題も人も光の春なれや

「印文未詳」白文方印（関防印）  
「宋淵」白文方印



図版35 色紙 とらやーやー無限次元の夜が明けて

「宋」白文方印・「淵」朱文方印





# 中川宋淵老師と俳句

鈴木隆幸

中川宋淵老師は、龍澤僧堂の禅僧であった一方で、俳句をはじめとする詩文の上手であったことは既に衆目の知るところである。人はその才をして「詩僧」と称するが、「不立文字 教外別伝」とされる禅において、果たして宋淵老師の俳句とは如何なるものであったのだろうか。ここでは幾つかの宋淵老師の作品を概観しながら、宋淵老師の俳句について触れてみたい。(以下引用部分の傍線は筆者による)

## 俳人・中川宋淵

宋淵老師の俳人としての活動は、高校時代に遡る。この頃から句作を始め、東京帝国大学文学部国文学科では芭蕉『猿蓑』を卒業論文の題材とし、出家後は、俳人・飯田蛇笏に入門する。そして、『詩籠』『命篇』といった詩句文集を發表する。しかしながら老師自身はこうした創作活動についてどのような考えを持っていたのか。その著作『詩籠』『世諦品』には次のようにある。

向嶽開山抜隊大和尚。宋淵を叱して曰く「你適来世諦に放曠して詩語俗談。甚だ没頭を極む。庵規を破るの大罪。什麼の処に向てか銷せん」。淵「和尚」と喚ぶ。隊応ず。淵良久。隊和尚則ら淵を許して放ち去らしむ。

また『命篇』跋文には

余の一生は詩籠・命篇・重筐の三部作を以てなり(中略)詩文に耽着して出家の本文を失する所以のものは、ひたすら「重筐」への道をたどればなり。とある。さらに『法光寿』の「あとがき」には、師である山本玄峰老師との商量「お前さんは俳人になってはいかん」「私は俳人ではありませんね」が編者・後藤榮山老師(現龍澤寺住職)により紹介されている。

これらから推し量るに、俳句や詩文に耽着することには相当の抵抗があったと思われる。敢えて自らの詩才を成めているようにも感じられるのである。しかしながら、これが故に却って禅も俳句もとらわれることのない世界「俳禅一如」の世界を生み出した所以ではないかと思われる。私は俳人ではありませんねーまさしく禅僧でも俳人でもない宋淵老師のコスモロジーともいふべき宇宙観がそこには存在するように聞こえてくるのである。

## 俳句の師・飯田蛇笏

宋淵老師の俳句を語る上で看過できないのが、師・飯田蛇笏の存在である。飯田蛇笏は明治から昭和にかけて活躍した俳人で、高浜虚子の『ホトトギス』に参加し、大正初期に俳誌『きらゝ』の撰者に迎えられ、後に『雲母』を主宰、山梨にあつて数々の佳句を生み出した。また、芭蕉を師と仰ぎ、その句風は莊重かつ格調高く、『山廬集』『白獄』『雪峽』等の句集がある一方で随筆、評論も多い。

この蛇笏と宋淵老師については、『詩籠』収載の「飯田蛇笏先生御跋文」や自著『俳句と私』に詳しいが、それらによれば、昭和六年閉山後の富士山に籠もった歸路に蛇笏の家に赴き入門したとある。この頃の老師は山梨塩山・向嶽寺にて修行している頃である。以後、修行の傍ら句作を続け、蛇笏の主宰する俳誌『雲母』に投句し、蛇笏からも称揚されるところとなる。また蛇笏との関係についてこんなエピソードもある。蛇笏臨終の直前、危篤の報が老師の許に届けられ、その時にはなんと老師の母も重態であったが、老師は蛇笏の許に馳せ参じ、葬儀の際には導師を勤めたというのである。その蛇笏は昭和三十七年十月三日に天寿を全うするが、母はその十日後に逝去された。「俳人ではない」という老師だからこそ、逆に俳人・飯田蛇笏の存在は計り知れぬものだったかも知れない。

## 宋淵老師と芭蕉

前述のように宋淵老師は大学の卒業論文で蕉門の発句・連句集である『猿蓑』を研究テーマに選んでいることから、句風や詩想など芭蕉からの影響を随所に感じさせる。例えば当館で所蔵する宋淵老師筆の市内田町奈良橋(現・中田町)樋口普化道場宛の葉書(左図上)には、

聴聞 稽古 禅飲 遺遠等と共にベイトベンやバッハ等の音魂にもふれられ高く悟って俗にかへる事肝要に存居候



宋淵老師筆葉書(当館蔵)



俳曲(不二山)(個人蔵)

とあるが、知性溢れるこの文面から真つ先に連想されるのは「高く心を悟りて、俗に帰るべし」という服部土芳が著した芭蕉の俳論書『三冊子』の中にある一説である。芭蕉の俳論といえは不易流行、風雅、わび、さび、軽みなどがその主なものとして知られているが、その芭蕉が禅や「荘子」から影響を受けていることは既に先学により数多く論じられている。そして常陸国鹿嶋の根本寺（臨済宗妙心寺派）の仏頂禪師に参禅し、このことを契機として「わび」「さび」を深めていったとも考えられている。例えば仏頂禪師との交わりを記した『鹿島紀行』の「無門の関もさはるものなく、あめつちに独歩して出ぬ」という条は、禅の公案集である『無門関』の「大道無門、千差路有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん」を踏まえている。さらには芭蕉自身も「ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏離祖室の扉に入らむとせしも」（『幻住庵記』）と述べるが如く、一時は仏門に入る覚悟が存在したようである。

以上のことから、宋淵老師が芭蕉俳諧あるいはその人生に影響を受けるのはもはや必然といっても過言ではあるまい。その傾倒ぶりは句風にも表れ、蛇笏を始めとする俳人たちが指摘するところである。

### 中川宋淵老師と俳句

宋淵俳句の特長を掲げるとするならば、語の繰り返しや対句による効果ということができる。例えば

たち返り たち返りつつ 祖師の春

など、同じ語の繰り返しにより句全体に独特のリズム感を持たせている。しかしながらここでは山頭火の「分け入つても分け入つても青い山」のような繰り返しによつて畳み掛ける力強さというよりは、初句の投げかけに対し二句以下でまとめるといった、禅問答にも似た様相を呈している。宋淵俳句を概観すると、繰り返しに限らずこの形式は意外に多いことが分かる。

まぼろしと まぼろしゆけば 月明り

宋淵俳句には「夢」「幻（まぼろし）」といった語句が散見する。この句はただ単に月明りに照らされた情景を幻のようであった、というだけではなく、今この世界が夢幻なのか現実なのか―芭蕉も影響を受けた『荘子』齊物論篇の寓言「胡蝶の夢」が想起される―繰り返しによる効果は句の表面だけにとどまらず、「夢幻と現実」といった大きなテーマの内任を示唆する。

海の音 山の音みな 春しぐれ

対句表現といえは与謝蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」が真つ先に思い浮かぶが、蕪村の場合もとより絵師として、対句によつてあたかもキャンパスに描かれた絵画をイメージさせる効果がある。しかし宋淵俳句は蕪村のそれとは異なり、前句同様非常に観念的である。飯田蛇笏はこの句評として「この作品で見逃しがたいものを感じるのには僧生活に附物のような禅ということである」（『新人俳句鑑賞』）と評し、「海の音」「山の音」に「禅」を感じている。不二見えて あの世界の世の 若菜摘む（前頁図下）

この句は「自選十句」に収められているものだが、ここにも「あの世界」という対句が見られる。「あの世界」と「この世」、換言すれば「死」と「生」か。老師曰く「不二」というと一つだという。一つというものが二つという概念があるから出てくる。二があるから一が生まれる。もともとそれ自体が不二なんです。一つだというのもダメ。只なんだ」「生と死は分断ではない。遷化、ジョイントだよ」（以上『仏音』）「今、我々がこの世だと思っている、此処、この時が、実はあの世界かも分からんぞ。又あの世界が遠い所かと思つているかもしれんが、今此処かもしれん」（『蜜多余香』）と述べている。これこそが俳禅一如と称される宋淵俳句の真髄ではないだろうか。「夢」と「現実」、「あの世界」と「この世」、「生」と「死」まさに渾然一体となった世界がそこには存在する。禅でも俳句でもない、それが「不二」であり「只」という言葉となつて老師の口から発せられるのだろう。

誰彼もあらず一天自尊の秋―この書（左図）は、蛇笏最後の句集『椿花集』末尾に掲載されている当該句を宋淵老師が揮毫したもので、一般には蛇笏辞世の句ともいわれている。誰も彼もない、まさに天（宇宙）と一体化する我（自分）、この句境こそが蛇笏から受け継いだものだったかも知れない。そこには師弟という枠をも越えた宇宙融合が存在するかのようである。

（すずき たかゆき／当館学芸員）



宋淵書（誰彼もあらず一天自尊の秋）（山梨県立文学館蔵）



年譜

| 和暦   | 年齢  | 玄峰老師   | 宋淵老師   | 年齢  |
|------|-----|--|--|-----|
| 慶応二  | 一歳  | 一月二八日、和歌山県湯の峰温泉(田辺市本宮町)、西村氏芳野屋に誕生。生後間もなく岡本善藏・とみえ夫妻の養子となり、芳吉と命名。                    |  |     |
| 明治一〇 | 一二歳 | 一月五日、養母逝去(三五歳)。  |  |     |
| 明治一七 | 一九歳 | いち女と結婚(四国遍路の際に離別)。この頃眼病を発す。  |  |     |
| 明治一八 | 二〇歳 | 眼病が進行し、この頃京都府立病院に入院する。   |  |     |
| 明治二〇 | 二二歳 | 医師から失明の宣告をうけ、華嚴滝、足尾銅山などをさまよひ、出雲崎で行き倒れになる。  |  |     |
| 明治二一 | 二三歳 | 四国遍路を始める。  |  |     |
| 明治二二 | 二四歳 | 四国遍路の途上、雪蹊寺(高知県)の山本太玄和尚と出会い、仏門に入る。   |  |     |
| 明治二三 | 二五歳 | 雪蹊寺にて得度。この頃より玄峰と号し始める。   |  |     |
| 明治二四 | 二六歳 | 雲水の修行に出る。永源寺(滋賀県)に掛錫する。  |  |     |
| 明治二六 | 二八歳 | 祥福寺(兵庫県)に掛錫。   |  |     |
| 明治二八 | 三〇歳 | 宝福寺(岡山県)に掛錫、九峰老師の鉗錮を受ける。   |  |     |
| 明治三〇 | 三二歳 | 虎溪山(岐阜県)に掛錫。   |  |     |
| 明治三四 | 三六歳 | 一二月一九日、雪蹊寺の太玄和尚と養子縁組。  |  |     |
| 明治三五 | 三七歳 | 太玄和尚発病のため、虎溪山より雪蹊寺へ帰る。   |  |     |
| 明治三六 | 三八歳 | 六月二八日、太玄和尚遷化。雪蹊寺住職を継ぎ、寺の復興に尽力する。   |  |     |
| 明治四〇 |     |  | 三月一九日、山口県岩国市、父・助太郎(陸軍軍医)、母・和子の長男として出生。基と命名(台湾基隆での妊娠による)。 | 一歳  |
| 明治四一 | 四三歳 | 雪蹊寺を太岳和尚に譲り、円福寺(京都府)に再行脚、宗般玄芳老師の鉗錮を受ける。  |  |     |
| 大正三  | 四九歳 | 宗般老師の法嗣となる。  |  |     |
| 大正四  | 五〇歳 | 三月上旬、龍澤寺へ正式入寺。四月二九日、養父逝去(七九歳)。龍澤寺の不動堂を裏山から現在の位置に移す。この後、禪堂の改修、庫裡の改装を企図し、龍澤寺の復興に尽くす。 |  |     |
| 大正七  | 五四歳 | 五月、松蔭寺(沼津市)住職兼任(昭和四年春まで)。  | 父逝去(三五歳)。  | 一二歳 |
| 大正八  | 五四歳 | 二月、外遊。米国大統領と会見、バーミンガムで開催中の世界平和研究会で講話。  |  |     |
| 大正一二 | 五八歳 | 龍澤寺、関東大震災で大破。  | 広島県立第一中学四年修了。東京第一高等学校入学。寄宿寮明寮八番。俳句は沼波瓊音に入門。俳号「臚旦」。       | 一七歳 |
| 大正一四 | 六〇歳 | 一〇月、仏蹟巡拝のためインドに旅行。   |  |     |



エルサレム禅堂にて



第一回渡米、千崎如幻師との初相見



喫茶 於 隠寮・妬の間

|      |     |  |   |     |
|------|-----|--|---|-----|
| 昭和二  | 六三歳 | 松蔭寺後住に宗鶴師を据え、九月、瑞泉寺（愛知県）晋山入寺。  | 東京帝国大学文学部国文学科へ入学。浄土宗の願行寺（文京区向丘）での下宿生活が始まる。勝林寺で勝部敬学老師の禅会をはじめ、諸方の禅会に通う。 | 二一歳 |
| 昭和三  | 六三歳 |  | 東京帝国大学卒業。卒業論文は、芭蕉「猿蓑」。同研究科一年在籍。女子専門学校で教師を務める。                         | 二三歳 |
| 昭和四  | 六六歳 | 瑞泉寺に禅堂を開單。   | 三月五日、塩山・向獄寺勝部敬学老師に就き得度。   | 二五歳 |
| 昭和六  | 六六歳 |  | 九月、俳誌『雲母』の主筆・飯田蛇笏に入門。   | 二六歳 |
| 昭和七  | 六七歳 | 七月、瑞泉寺退山。  | 中里介山（大菩薩峠）の著者と交遊。   | 二六歳 |
| 昭和八  | 六八歳 | 覚王山日泰寺（名古屋）へ住職として赴任。   | 木食生活（一切生食・一日一食）に入り『詩籠』を編む。  | 二七歳 |
| 昭和九  | 六九歳 | 八月、飯山の正受庵（長野県）住職兼務（一五年まで）。<br>九月一日、血盟団事件の井上日召氏の「魂の父」として特別弁護。                 | 三月、一高陵禅会発足（当初は師家勝部敬学老師その後玄峰老師、宋淵老師と続く）。                               | 二八歳 |
| 昭和一〇 | 七〇歳 | 六月、日華仏教研究会の一人として、日華親善のため渡華。<br>この頃、宋淵老師は東京での玄峰老師の提唱を聞き、傾倒するようになる。宋淵老師龍澤寺へ転錫。 | 『婦人公論』の『詩籠』紹介記事を縁に千崎如幻師との文通始まる。                                       | 二九歳 |
| 昭和一一 | 七一歳 | 七月、満州新京に玄峰老師を開山とする妙心寺別院開創。<br>一月、新京妙心寺別院禅堂開單式挙行。                             | 三月二日、『詩籠』発行（大正一五年〜昭和一年）。  | 三〇歳 |
| 昭和一二 | 七二歳 | 満州、朝鮮、内地間をしばしば往来する。  | 八月一日、大菩薩峠祭り。「大菩薩峠」を演じ、「詩籠踊り」を演出。                                      | 三一歳 |
| 昭和二三 | 七三歳 | 満州国の西方国境を視察する。   |   | 三二歳 |
| 昭和一五 | 七五歳 | 一月、新京妙心寺別院住職退隠。三月、正受庵兼務住職辞任。   |   | 三四歳 |
| 昭和一六 | 七六歳 |  | 一〇月、龍澤寺僧堂開單。  | 三五歳 |
| 昭和一七 | 七八歳 | 喜寿大祝賀会催される。  |   | 三六歳 |
| 昭和二二 | 八二歳 | 玄峰老師は、四月一日付遺言書に「龍澤寺後任住職中川宋淵と決定す」と記す。   |   |     |
| 昭和二三 | 八三歳 | 一〇月、妙心寺派管長に就任（昭和二四年二月まで）。<br>花園大学改革に骨を折る。                                    | 三月、第二回米国巡錫。千崎如幻師に初対面。<br>『命篇』発行（昭和一年〜二四年）。                            | 四三歳 |
| 昭和二四 |     |  | 宋淵老師龍澤寺第一〇世住職として晋山。   | 四三歳 |
| 昭和二六 | 八六歳 |  |   | 四五歳 |
| 昭和二八 | 八八歳 | 四月二五日、玄峰老師龍澤寺住職退任。来会者は四百人に達する。<br>「寿」を大書揮毫。                                  |   | 四七歳 |
| 昭和三〇 | 九一歳 |  | 二月五日、第二次米国巡錫。   | 四九歳 |
| 昭和三一 | 九二歳 |  | 千崎如幻師五〇年ぶりに来日。龍澤寺来山。  | 五〇歳 |
| 昭和三二 | 九二歳 | 一月、九二歳誕辰祝賀会が催される。  |   |     |
| 昭和三三 | 九三歳 | 三月、九三歳誕辰祝賀会が催される。こうした会は年々催された。   | 七月一六日、第三次米国巡錫。  | 五二歳 |



|      |     |  |  |  |  |
|------|-----|--|--|--|--|
| 昭和三五 | 九五歳 | 一二月、狭心症の発作、以後床上の人となる。  |  | 二月一日、第四次米国巡錫。  | 五四歳  |
| 昭和三五 | 九六歳 | 五月一六日、「玄峰塔」を大書揮毫。<br>六月三日、竹倉伯日荘において遷化。<br>六月二五日、般若斎を営む。<br>九月二八日、生誕地和歌山県湯の峰温泉に「玄峰塔」建立。 |  <p>不動尊例祭出頭前</p>  <p>井上日召氏弁護前</p>  | <p>一月二八日、第五次米国巡錫。</p> <p>一〇月一三日、母逝去（七四歳）。</p> <p>一月二九日、第六次世界行脚（インド、ヨーロッパ、イスラエルなど）。</p> <p>三月二七日、般若水道開通。</p> <p>三月二六日、白隠禪師二百年遠忌。</p> <p>六月二〇日、第七次巡錫、安谷量衡老師と共に。</p> <p>九月一六日、エルサレム飛錫。中川球童老師の禪堂を基仏寺と命名。</p> <p>八月一八日、第八次米国巡錫、嶋野榮道師同行。</p> <p>六月一三日、第九次米国巡錫、牧島如鳩画伯同行。</p> <p>七月四日、ニューヨーク大仏開眼。</p> <p>七月二六日、第一〇次巡錫。</p> <p>五月二二日、龍澤寺住職退任。鈴木宗忠老師に後任を託す。</p> <p>一月一六日、第一次海路カリフォルニア丸にて「大菩薩の夕」。</p> <p>四月一六日、イスラエルへ。</p> <p>八月六日、第二次米国巡錫、仏師・中野清光師同行。帰路スイスで接心。</p> <p>五月四日、古希祝賀会。</p> <p>二月二八日、秩父霊地巡礼。</p> <p>四月九日、一三日、四国巡錫。</p> <p>一二月二〇日、龍澤寺新禅堂上棟式。</p> <p>六月一七日、二四日、新禅堂建立報恩大接心、『臨濟録』提唱。</p> <p>六月二六日、八月九日、第一三次米国巡錫。</p> <p>一〇月一一日、禅堂落慶慶讃法要、「新禅堂の由来と将来の魂胆」執筆・発行。</p> <p>『遍界録 古雲抄』上梓印施。</p> <p>一〇月、喜寿祝。</p> <p>三月一一日、午前四時三〇分、急性心不全にて遷化。</p> <p>四月一一日、津葬（葬儀）。</p> <p>七月四日、ニューヨーク大菩薩禅堂に分骨、納骨。</p> | <p>五五歳</p> <p>五六歳</p> <p>五七歳</p> <p>六一歳</p> <p>六二歳</p> <p>六四歳</p> <p>六五歳</p> <p>六六歳</p> <p>六七歳</p> <p>六八歳</p> <p>六九歳</p> <p>七〇歳</p> <p>七一歳</p> <p>七五歳</p> <p>七六歳</p> <p>七七歳</p> <p>七八歳</p> |
| 昭和三五 | 九六歳 |  |  |  |  |
| 昭和三七 |     |  |  |  |  |
| 昭和三八 |     |  |  |  |  |
| 昭和四二 |     |  |  |  |  |
| 昭和四三 |     |  |  |  |  |
| 昭和四五 |     |  |  |  |  |
| 昭和四六 |     |  |  |  |  |
| 昭和四七 |     |  |  |  |  |
| 昭和四八 |     |  |  |  |  |
| 昭和四九 |     |  |  |  |  |
| 昭和五〇 |     |  |  |  |  |
| 昭和五一 |     |  |  |  |  |
| 昭和五二 |     |  |  |  |  |
| 昭和五六 |     |  |  |  |  |
| 昭和五七 |     |  |  |  |  |
| 昭和五八 |     |  |  |  |  |
| 昭和五九 |     |  |  |  |  |

# 作品目録

| NO. | 名 称                 | 作者等         | 年齢 | 形状   | 形態    | 員数 | 本紙寸法(縦×横) cm | 所 蔵 |
|-----|---------------------|-------------|----|------|-------|----|--------------|-----|
| 1   | 玄峰老師頂相              | 玄峰老師賛 結城素明画 | 89 | 軸装   | 絹本着色  | 一幅 | 一三七・二×五〇・五   | 龍澤寺 |
| 2   | 宋淵老師頂相              | 正因老師賛       |    | 軸装   | 絹本着色  | 一幅 | 一一三・五×五三・八   | 龍澤寺 |
| 3   | 達磨                  | 白隠禪師        |    | 軸装   | 紙本墨画  | 一幅 | 一一一・三×五一・三   | 龍澤寺 |
| 4   | 玄峰塔                 | 玄峰老師        | 96 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一五六・〇×七八・〇   | 龍澤寺 |
| 5   | 玄峰塔由来記              | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一六三・〇×四八・〇   | 龍澤寺 |
| 6   | 寿                   | 玄峰老師        | 88 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一七六・〇×九四・〇   | 龍澤寺 |
| 7   | 幽光                  | 玄峰老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三四・二×六七・七   | 龍澤寺 |
| 8   | 夢                   | 玄峰老師        | 92 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 六五・三×三三・一    | 龍澤寺 |
| 9   | 指月                  | 玄峰老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 二七・五×四二・五    | 龍澤寺 |
| 10  | 雪月佐                 | 玄峰老師        | 83 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 四三・五×二七・五    | 龍澤寺 |
| 11  | 赤子 これはかみの子          | 玄峰老師        | 93 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 四〇・六×六二・〇    | 龍澤寺 |
| 12  | 母わ実にアリガタイ           | 玄峰老師        | 91 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一六・二×二〇・一    | 龍澤寺 |
| 13  | 富士山 東海天             | 玄峰老師        | 95 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 四五・四×五一・三    | 龍澤寺 |
| 14  | なます ぬらりくらりとついにとしより  | 玄峰老師        | 92 | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 三九・〇×二七・八    | 龍澤寺 |
| 15  | 茶碗 玄                | 玄峰老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一口 | 高八・四×口径一・二・一 | 龍澤寺 |
| 16  | 茶碗 翁                | 玄峰老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一口 | 高七・六×口径一・二・三 | 龍澤寺 |
| 17  | 独楽香合                | 玄峰老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一合 | 總高六・四×口径六・二  | 龍澤寺 |
| 18  | 皿                   | 玄峰老師        | 90 | 軸装   | 紙本墨書  | 五客 | 高二・五×口径一・五・〇 | 龍澤寺 |
| 19  | 蜜庵                  | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一九・三×四九・八    | 龍澤寺 |
| 20  | 南無大菩薩               | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三一・六×六七・五   | 龍澤寺 |
| 21  | 因                   | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三五・八×三三・八   | 龍澤寺 |
| 22  | 南無尽十方不可思議無量壽光如来     | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三七・五×三四・〇   | 龍澤寺 |
| 23  | 土性骨                 | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一一八・五×三〇・八   | 龍澤寺 |
| 24  | 松老雲閑                | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三三・二×三一・八   | 龍澤寺 |
| 25  | 禅堂の中にも舞ひぬ夕もみち       | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一九六・〇×四六・二   | 龍澤寺 |
| 26  | 春之山ゆけば道ありどこまでも      | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一三一・〇×三三・七   | 龍澤寺 |
| 27  | 只                   | 宋淵老師賛 牧島如鳩画 |    | 軸装   | 紙本墨画  | 一幅 | 七四・〇×一四〇・二   | 龍澤寺 |
| 28  | MOOT                | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 一〇八・〇×三七・八   | 龍澤寺 |
| 29  | 日月観音                | 宋淵老師賛 沢 蔵月画 |    | 軸装   | 紙本金泥画 | 一幅 | 一三五・五×六四・八   | 龍澤寺 |
| 30  | 不動尊                 | 宋淵老師賛 牧島如鳩画 |    | 軸装   | 紙本淡彩  | 一幅 | 六七・〇×三三・六    | 龍澤寺 |
| 31  | 雲母                  | 宋淵老師        |    | 軸装   | 紙本墨書  | 一幅 | 六〇・三×三三・九    | 龍澤寺 |
| 32  | 盆 母                 | 宋淵老師        |    | 軸装   | 木製    | 一面 | 口径二六・五       | 龍澤寺 |
| 33  | 色紙 了々々時無可了          | 宋淵老師        |    | 色紙   | 紙本墨書  | 一枚 | 二七・五×二四・五    | 龍澤寺 |
| 34  | 色紙 勅題も人も光の春なれや      | 宋淵老師        |    | 色紙   | 紙本墨書  | 一枚 | 二七・五×二四・五    | 龍澤寺 |
| 35  | 色紙 とらやーやー無限次元の夜が明けて | 宋淵老師        |    | 色紙   | 紙本墨書  | 一枚 | 二七・五×二四・五    | 龍澤寺 |
| 36  | 深皿 観自在              | 宋淵老師        |    | 紙本墨書 | 紙本墨書  | 一枚 | 高三・九×口径一八・〇  | 龍澤寺 |
| 37  | 茶杓 銘 Jerusalem 共筒   | 宋淵老師        |    | 竹製   | 竹製    | 一本 | 長さ 一一・〇      | 個人  |
| 38  | 茶杓 銘大吉 共筒           | 宋淵老師        |    | 竹製   | 竹製    | 一本 | 長さ 一九・五      | 個人  |
| 39  | 詩籠                  | 宋淵老師        |    |      |       | 一冊 | 二四・五×一七・〇    | 個人  |
| 40  | 命篇                  | 宋淵老師        |    |      |       | 一冊 | 二二・五×一五・五    | 個人  |

※所蔵の記入のないものは三島市郷土資料館所蔵



- 『いつぶく拝見―禅のことば・茶のこころ』 千坂秀学著 淡交社 平成二十年十月
- 『犬山の玄峰老師』 犬山教育委員会 平成元年四月
- 『回想―山本玄峰』 玉置辨吉編著 春秋社 昭和四十五年八月
- 『空華』 龍澤寺蔵版 昭和六十一年三月
- 『玄峰老師』 高木蒼梧著 大蔵出版 昭和三十八年八月
- 『玄峰老師』 高木蒼梧著 大法輪閣 平成二十一年七月
- 『再来―山本玄峰伝』 帯金充利著 大法輪閣 平成十四年七月
- 『新版 社会人のための国語百科』 内田保男・石塚秀雄編 大修館書店 平成四年四月
- 『宋湖俳句とその周辺』 阿部寒林著 富士経済 昭和五十三年四月
- 『大菩薩峠の囲炉裏』 勝縁荘開設五十年記念刊行会編 けやき出版 昭和五十八年八月
- 『茶席の禅語大辞典』 有馬頼底監修 淡交社 平成十四年二月
- 『日本人名大辞典 現代』 平凡社 昭和五十四年七月
- 『白隠禅画墨蹟』 花園大学国際禅学研究所編 二玄社 平成二十一年三月
- 『仏教辞典』 岩波書店 平成元年十二月
- 『仏音 最後の名僧10人が語る「生きる喜び」』 高瀬広居著 朝日新聞社 平成十四年九月
- 『法光寿』 龍澤寺蔵版 昭和六十年三月
- 『牧島如鳩展図録』 美術館連絡協議会 平成二十年十一月
- 『三島市誌 増補』 三島市誌増補版編さん委員会 三島市 昭和六十二年五月
- 『蜜多余香』 龍澤寺編 平成二年四月
- 『蜜多窟窟提唱』 龍澤寺蔵版 平成六年四月
- 『無門関提唱』 山本玄峰著 大法輪閣 昭和三十五年十月
- 『明暗雙々 東京大学陵禅会六十年史』 東京大学陵禅会六十年史編集委員会 ペリかん社 平成七年十月
- 『山本玄峰老師展図録』 三島市郷土資料館編 昭和五十七年十月
- 『山本玄峰老師展図録』 三島市郷土資料館編 平成十八年三月

謝 辞

本企画展を開催するにあたり、貴重な作品をご出品いただきました所蔵者をはじめ、作品調査などで貴重なご助言、ご協力をいただきました方々、並びにここにお名前を記すことができなかつた関係各位に心から謝意を表します。

協 力 者 (敬称略・五十音順)

足利市立美術館

犬山市文化史料館

向嶽寺

法泉寺

山梨県立文学館

祐泉寺

龍澤寺

井原一郎

江尻潔

北岡佐知子

小原游堂

水野秀和

渡邊時子



平成二十一年度企画展

玄峰老大師五十年  
没後 宋淵老大師二十七年 墨蹟展

会 期 平成二十二年三月九日～六月六日  
会 場 三島市郷土資料館  
主 催 三島市教育委員会・三島市郷土資料館

発行日 平成二十二年(二〇一〇)三月九日  
編集・発行 三島市郷土資料館

静岡県三島市一番町一九の三葉寿園内  
電話 〇五五(九七一)八三二八  
<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>  
印刷 大和印刷株式会社



Mishima-city Museum of Local History  
**三島市郷土資料館**